

内陸文化と信州の歴史

山本英二

1. 内陸地域としての信州

(1) 長野県と信濃国

信州というのは信濃国、すなわち明治時代になるまで用いられていた旧国名である。そして信州は、現在の長野県という県域とほぼ同じである。しかし長野県民は、自身の県民としての意識を、自負を以て信州・信州人と表現し、また他の地域の人々からも信州・信州人という言葉は、良くも悪くも長野県の風土と県民性を示すものとして受け止められている。

長野県の語源となった長野は、もともと善光寺の門前に立地しながら、門前の拡大によってやがて吸収されてしまった長野村に由来している。この善光寺門前町を県庁所在地にした長野県は、そののち明治9年(1876)の筑摩県との合併時により、中南信地方を県域に含んだがために、長野県の呼称は、ややもすれば松本を中心に違和感をいだかれた。

同じことは、信州大学にも当てはまる。現在、全国に99ある国公立大学のなかで、旧国名を大学名に冠しているのは、信州大学と琉球大学のふたつだけである。信州大学は、1972年に沖縄がアメリカから返還されるまで、長く日本で唯一の旧国名の大学であった。

1949年の国立学校設置法により長野県に国立大が設置されるとき、その名称が長野大学でも松本大学でもなく信州大学とされた。その理由は、大学の前身となった戦前までの松本高等学校や松本医科大学、その他の師範学校や専門学校などを、1か所に統合することなく、長野・上田・松本・伊那のキャンパスに分散させたために、特定の市町村名や県名を校名に採用しなかった(できなかった)からである。

なぜなら長野県は、県の面積が広大な上に、内陸地域であるがため周りを山々に囲まれ、それぞれの地域が峠に隔てられ、地域的な独自性を醸成している。そして県内は、大きく北信・東信・中信・南信に分類される。北信地方は長野市を、以下東信は上田市、中信は松本市、南信は諏訪・伊那・飯田市を中心として構成されており、それぞれ独自の小世界を作り上げているからである。

にもかかわらず、信州・信州人として総括されるような一体性や共通性を以て語られることが多いのはなぜだろうか。この信州・信州人のイメージ、つまり県民性の由来を、内陸文化としての信州という側面から、歴史的に考察を加えてみる必要がある。

(2) 地域呼称としての信州・イメージの逆転

信州と信州人の一体性を語るとき、必ず取り上げられるのは県歌・「信濃の国」である。

「信濃の国」は、明治32年(1899)、『信濃教育会雑誌』に発表されたもので、日清戦争に勝利した当時の世相を反映して、愛国心と愛郷心を高めようとするものであった。作詞を手がけた浅井湧は、旧松本藩士の家に生まれ、長野師範学校を卒業したのち、当時は県師範学校の教諭をしていた。当初は師範学校で歌われたに過ぎないこの歌が、県の歌として定着したのは、師範学校の卒業生が、信濃教育会の会員として組織され、やがて赴任先の県下の学校教育現場で唱歌や校歌の代わりに採用していったことに起因する。

ただし、「信濃の国」が学校現場で1世紀にわたり、何の変化もなく歌われ続けたと見るのは正確ではない。1970年代前後の高度経済成長期の最中、長野県の小学校では独自の校歌の制定が進められており、その過程で校歌としての「信濃の国」の意義は著しく低下している。ここで「信濃の国」の1番と2番の歌詞を紹介しておこう。

史料①信濃の国

1. 信濃の国は十州に境連ぬる国にして

そびゆる山はいや高く流れるる川はいや遠し
松本・伊那・佐久・善光寺四つの平は肥沃の地
海こそなけれ物さわに万足らわぬ事ぞなき

2. 四方にそびゆる山々は御岳・乗鞍・駒ヶ岳

浅間は殊に活火山いづれも国の鎮めなり
流れ淀まず行く水は北に犀川・千曲川
南に木曽川・天竜川これまた国の固めなり

現在でもよく唱和されるのは、この1・2番である。そしてこの歌詞には、信州の地理景観が的確に盛り込まれている。しかし塚本学によれば、この浅井の作詞には、参照された江戸時代の地誌があったという(塚本学「18世紀における地域—信州筑摩郡大池村の例から—」徳川林政史研究所『研究紀要』昭和51年度、1977年)。それはつぎに掲げる吉沢好謙「四鄰譚藪」の一文である。

史料②吉沢好謙「四鄰譚藪」(『新編信濃史料叢書』8巻)

一、信濃国八十国に隣りて地甚高し、大行山千里河北の諸州旋其趾といへる類也、浅間嵩其首領にして、本郡此嵩の陽にあり、北国第一の高地也、本国を水源として、木曽川・天中川今天竜川・千曲川・ひめ川・利根川・富士川等也、其外武の荒川・神奈川・大井川も国の境に出て、他の斜嶺につくもの也、上古不毛の地しられたり、

吉沢好謙は、宝永7年(1710)信濃国佐久郡岩村田宿の鍛冶屋の3男に生まれ、養子となった先の家業である通貨業のかたわら、寺子屋を開き、郷土史研究や俳諧にいそしんだ。良く知られる著作としては、享保21年(1736)「四鄰譚藪」・延享元年(1744)「信陽雑誌」・安永2年(1773)「信濃地名考」などがある。

「四鄰譚藪」は全7巻構成で、佐久の岩村田を中心に、中世から近世にかけての歴代の城主や仏寺の沿革盛衰を一庶民の立場から記したもので、随所に権力者批判をするなどしている。

先に記した一節は、同書の冒頭の部分である。10州というのは、信州に隣接する諸国（武蔵・甲斐・上野・越後・越中・飛騨・美濃・三河・遠江・駿河）のことを指す。浅間山が特にランドマークとして強調されるのは、好謙が佐久の人だからである。そして全国に名だたる大河は、いずれも信州を源流としていることが強調されている。ところが、「信濃の国」では、4つの平らは肥沃の地であり、浅間山は国の鎮め、流れよどまず行く水は国の固めで、すばらしい自然の恩恵として表現されているのに対し、「四鄰譚藪」では、「上古不毛の地しられたり」と貧しい土地柄を象徴するものとして結論づけられている。ここに山河に囲まれた信州に対するイメージの逆転があるのである。「信濃の国」では誇りとともに描かれている山と川は、「四鄰譚藪」では不毛の地の象徴でしかないのである。それに同じ「国」という言葉も、大きく異なる。浅井が想定している「国」は、直接的には信濃国を指しているが、やがて国外に流れ出る川々は、明らかに日本という国を意識した用語を思わせる。しかし吉沢の「国」には、本郡＝佐久郡の延長線上にある「本国」＝信濃国以外のニュアンスはうかがえない。

思うに、作詞家浅井の背後には、信濃教育会と日清戦争後の国民国家日本が透けて見えてくるのであり、そこには今でもしばしば語られる「教育県長野」＝信州・信州人の県民性というジレンマがある。

2. 中世の信濃国と信州人

（1）信州人気質の原点

それでは信州の信州たる本質はどこにあるのか。山と川と峠に囲まれた内陸を閉鎖系と見るのか、それとも開放系と捉えるのか。信州という一体性に県民性を求めるのか、それとも北・東・中・南信に分かれた分断性に求めるのか。

たしかに長野県の成立事情に注目すれば、信州・信州人のイメージは、近代化によってもたらされたものだといえる。逆に飯山・須坂・松代・上田・小諸・田野口・松本・高島・高遠・飯田の譜代・外様小藩や、信州中野・中之条・飯島の幕府代官所によって分断されて非領国地域として存在していた江戸時代に淵源すれば、信州の本質は分断性に求められよう。

それよりも信濃国などという地域区分で、地域住民の人間性を分析すること自体、果たしてどれほどの意味があるのだろうか。旧国は、郡や里と共に、律令国家の段階に地域によって人民を区分するものとして設定されたものであり、公権力の確立と並んで、国家成立の指標とされる。最終的には日本全国では66か国が存在していた。この古代国家の人民区分単位は、中世から近世においても、封建的な領主支配区分と共に、伝統的な地域区分の枠組みとして存続し、やがて近現代の都道府県制度の原型となったのである。

現在の都道府県数は47、対する旧国数は66であるから、現在の都道府県の中には、旧国が複数合併したところが存在する。また武蔵国のように、東京都・埼玉県・神奈川県

都2県に分裂したところもあるから、旧国を単位にして県民性を推し量ることができない地域がある計算になる。しかし信濃国の場合、筑摩県と長野県が合併した以後の長野県とほぼ一致しており、長野県の県民性＝信州人という議論が成り立つのである。

(2)「人国記」に見える信州人

信州人論が展開された端緒は一体どこにあるのだろうか。おそらく「人国記」が最も古い風土と人間の性格を結びつけて議論した最初であろう。

「人国記」は、2巻1冊本で、その著者や成立年代ははっきりしない。しかし武田信玄が「人国記」に言及していることから、16世紀の初頭から後半頃にはすでに存在していたようである。よって中世末期＝戦国期頃の時代相を反映していたと理解して差し支えない。

同書の内容は、日本66余州を、畿内・東海道・東山道・山陰道・山陽道・南海道・西海道、それに壱岐・対馬の2島を加えて、国毎の人情・風俗・気質・性格を指摘し、評論したものである。そこで、「人国記」中の信州人の部分を掲出してみよう。

史料③『人国記・新人国記』(岩波文庫)

信濃国

信濃の国の風俗は、武士の風俗天下一なり。尤も百姓・町人の風儀もその律儀なると、伊賀・伊勢・志摩の風俗に五畿内を添へたるよりは猶も上なり。所以は義理強く、臆することなく、百人に九十人は律儀なり。たまたま臆病なる者ありといへども、それも他国の形の如くの人と云ふ程には有らずして、適々の物語にも、弱みの比興の事はこれ無し。若し比興の事を述べ亦なすときんば、人皆これを悪みて交はらざる故に、柔弱の人も、後には義理を知りて国風となるなり。都て智恵も余国よりは勝れたり。然れども偏鄙の国なる故に、かたくへなき事も多しといへども、善十にして悪一、二の風俗なり。

信濃国の風俗は、武士の風俗であり、それは天下一＝日本一である。そして百姓・町人も律儀なことと伊賀・伊勢・志摩の風俗に五畿内を加えたものよりも上である。その理由は、義理堅く、物事に臆することなく、住民の9割が律儀者だからである。たまたま臆病者がいても、それは他国の臆病とは比較にならないほどの軽い程度のものである。たまたま卑怯な振る舞いをする者がいたとしても、つき合いをはずされてしまうために柔弱な者でも次第に律儀になる。すべて知恵は他国に勝れている。しかし辺鄙な土地柄であるために頑ななところもあるが、8割方が善人の国柄である。

こうしてみると信州人というのは、きわめて好意的に捉えられているといえる。唯一の欠点といえば、辺鄙な土地柄故の頑固さであろうか。これも現在の信州人と通底するところがあり興味深い。

しかし「人国記」の信州人礼賛には、カラクリがある。じつはこの「人国記」の作者は、元禄の古写本などの奥書などから、信州の人によって作成されたのではないかと推定されている。つまり、信州のことを絶賛しているのは、作者が信州人だったからである。とはいえ、旧国を単位にしながらか風土や土地柄と地域住民の個性を関連づけて理解しようとする

る試みが、中世末に存在していたことに注意しておきたい。

3. 近世の信濃国と松本

(1) 信州中馬と城下町松本

つぎに近世の信州について、当時の物流構造に着目しながら考えてみたい。なかでも現在、信州大学人文学部のキャンパスが立地している松本に重点を置いて論じてみたい。

近世の松本は、江戸幕府の譜代大名が配置される松本城を中心とした城下町である。中世には守護所が置かれ、守護大名小笠原氏が本拠としていたところである。

とはいっても江戸時代の主要幹線である中山道は通っていない。江戸と京都を結んだ中山道は、木曾谷を抜けたあと、塩尻から下諏訪を経由して和田峠を越えて佐久地方、上野国に通じている。また江戸から多摩地域や甲斐国を経由する甲州道中も、上諏訪を最終地点としている。

近世の松本を経由・起点とする街道としては、善光寺街道と千国街道がある。善光寺街道は、その名の通り信濃の名利善光寺へと向かう信仰の道である。中山道を洗馬宿で分岐し、郷原、村井を経て松本に至る。さらに岡田、刈谷原、会田、麻績、稲荷山から篠ノ井追分で北国街道に合流し、善光寺に至る。大名行列もほとんど通らない脇往還である。

千国街道は、松本を起点にして、越後国糸魚川を終点とする脇往還である。千国街道の千国とは、信越国境に位置する千国番所に由来した名称である。千国街道は、別名「塩の道」と呼ばれたように、これこそ越後国と信州松本を結んだ物流ルートである。

松本の場合、五街道のような主要幹線ルートから外れていることや、大量の物資を運搬するための河川交通が発達せず、また内陸部であるがゆえに海上交通網が存在しないため、物資の運搬は、もっぱら牛馬や人力に依存せざるをえなかった。それゆえに幕府の公的な運送システムである伝馬制度によらない民間の輸送手段、すなわち中馬稼ぎが主要な運送手段として発達したのである。

中馬稼ぎというのは、手馬稼ぎともいわれ、輸送専門業者ではない百姓が、自ら保有する馬を使役して、農業の合間に農間渡世としておこなった運輸方法のことである。中馬は、ひろく信州伊那谷や松本平、それに美濃国や三河国などに展開していた。

中馬稼ぎの利点は、百姓の余業であるために、宿駅ごとに荷物の積み換えがいらないこと、それに手荷物扱いであるために問屋で口銭（運搬手数料）が徴収されないことであった。つまり公的な運搬システムよりも、荷物が滞らないから荷痛みも少なく、なおかつ安価で迅速な輸送が出きたのである。そのため宿駅の荷問屋と中馬は、何度も争論を繰り返し、明和元年（1764）の幕府裁許によって、中馬慣行は容認されるに至るのである。

(2) 東西の交流点としての信州、そして松本

それでは中馬による物流網を主体としていた松本には、どのような物資が集散していた

のだろうか。ここでは、貞享3年（1686）の松本本町茶屋伊兵衛が書き残した「大福帳」によって明らかにしてみたい。

当時の松本の城下町には、塩尻方面から出川、博労町を通過して本町に入る。そして本町から、外堀の役割を果たしている女鳥羽川に沿うかたちで右折して中町に入り、さらに再び北上して東町を通過しながら、次の岡田宿に抜けていくようになっている。女鳥羽川を渡った先には松本藩の上級家臣らが居住する武家地が展開しており、百姓・町人の立ち入りは大きく制限されていた。つまり本町・中町・東町に商業地域が集中し、たくさんの町人たちが商売を営んでいた。

茶屋伊兵衛は、本町に店を構えて、茶を中心に様々な商品を扱う商人である。貞享3年の「大福帳」は、松本藩松川組大庄屋を勤めた清水家の所蔵にかかるものである。本史料については、はやく中井信彦によって詳細な分析がおこなわれている（中井信彦「元禄期の都市商業と農村商人」伊東多三郎編『国民生活史研究』第2巻、吉川弘文館、1959年）。

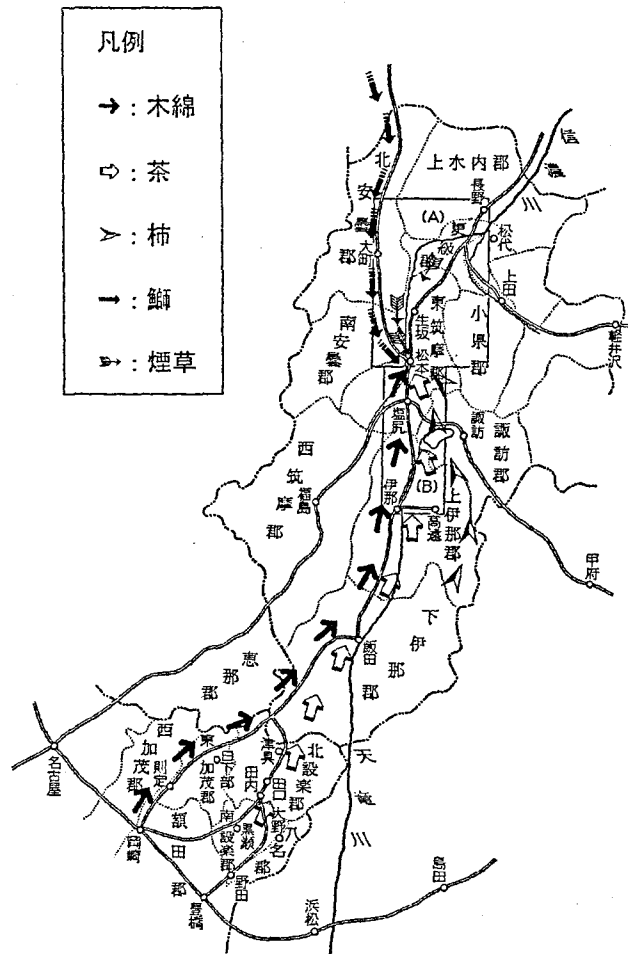
まず図①を参照しながら見ていきたい。中井によると、茶屋伊兵衛のところには、貞享3年の1年間に80か町村317人の取引者がやってきている。このうち都市部に属するのは善光寺町や信濃大町など5町にすぎず、残りはすべて村落居住者であった。村落居住者の大半は信濃国内であるが、なかには甲斐・遠江・三河国の遠隔地からもやってきている。彼らは、自身の所有する手馬に荷物を積んで、はるばると松本まで売り込みにやってきたのである。

こうして持ち込まれた商品を見ると、いくつかおもしろいことがわかる。伊兵衛は、茶屋を屋号とするように、主要な取引商品はお茶で、直接買い取りをおこなっている。お茶は年間を通じて、信州では上・下伊那地方と三河国設楽・加茂郡や遠江国から持ち込まれている。

お茶以外にも様々な品物が取引されているが、これらはすべて仲介商品で、手数料の口銭取得が目的でもあった。まずタバコが松本と同じ筑摩郡の犀川流域の村々から持ち込まれている。これは生坂タバコが特産物であったことによる。また伊那地方からは干柿が入ってくる。現在でも高森町の市田柿は全国的に知られている。つぎに衣料品として木綿が扱われている。これはもっぱら三河国から入ってくる。

このほか季節的な商品としてブリがある。これは信州伊那地方と三河国の村々の百姓たちが、タバコ以外に帰り荷として10月中旬以降年末にかけて買い込んでいく。ブリは、主に糸魚川方面から千国街道を経由して松本に出荷されたものである。わざわざ交通の不便な季節に売買がなされるのは、年取り用の魚として買い込んでいったからである。現在では次第に廃れつつあるが、古くからの民俗慣行として、人間は正月を迎える毎に1歳年を取り、そのとき吉例として白飯に添えて、西日本ではブリを、東日本ではシャケを食べることが多かった。おなじ信州でも、長野を中心とする北信地方ではシャケを食べるが、松本あたりではブリを食べるのである。つまり信州は東西の分岐点でもあり、また東西が混合する地域なのである。

図
①



中井信彦「元禄期の都市商業と農村商人」

(『国民生活史研究』2巻, 1959 を加工)

ブリは、厳冬期に千国街道を越えてやってくるが、雪に道を塞がれているために牛や馬が使えない。そこで、ボッカ（歩荷）と呼ばれる人間が、ブリを背中にしょって、わざわざ運んでくるのである。

まとめると、近世の松本は、日本海側と太平洋側を結ぶ物資の流通拠点であり、しかも主要幹線ルートから外れているが故に、中馬輸送による民間の輸送網が発達した地域であった。文化的に見ても東日本と西日本の文化が交わる場所でもあった。江戸時代といえ

ば、人口の 85%を百姓身分が占め、自給自足経済に立脚した封建社会という印象が強い。しかし現代のように高度な資本制社会の下で、流通機構が発展していなかった時代、自らの生産物を、自らが所有する牛馬で都市部に販売し、現金と必要な生活物資を手に入れていたのである。この点では、近世の百姓が生きていくための行動半径は、現代人とは比較にならないほど大きかった。現代に生きるわたしたちは、可能性としては地球的な規模で移動することが可能であるが、逆に日常の生活半径はきわめて狭くなっている。

むすびにかえてー展望ー

以上、内陸文化と信州の歴史を考えると、信州は内部には北・東・中・南信の個性的な小地域を構成しながら、一体性をかたちづけている。そのなかで松本は、信州のほぼ中心に位置するという立地条件もあって、近世から物資の結節点として、東日本と西日本、それに日本海側と太平洋側とを結びつけるところであった。こうした要素は、現在でもかわらない。特に信州大学に限ってみても、北は北海道から南は沖縄まで、全国各地から学生が集まる全国規模の大学である。

しかし現在の信州の風土に目を向けると、内部での自己認識と外部からのイメージとでしばしば矛盾をきたしている。特に外部から教育県として語られる印象が、内部的には進学率低迷のために県民のジレンマになっている。教育県長野という本質如何の議論はさておき、内陸文化をキーワードにした人文科学的な手法により信州という地域の個性を、客観的に相対化してみることは、重要な課題である。

参考文献

塚本学「18世紀における地域ー信州筑摩郡大池村の例からー」徳川林政史研究所『研究紀要』昭和51年度、1977年。

中井信彦「元禄期の都市商業と農村商人」伊東多三郎編『国民生活史研究』第2巻、吉川弘文館、1959年。

古島敏雄『古島敏雄著作集 第2巻 信州中馬の研究』、東京大学出版会、1974年。

平川新『近世日本の交通と地域経済』、清文堂出版、1997年。